早稲田大学研究院　総合研究機構

社会的養育研究所

２０２２年度
乳幼児里親支援研修
開発プロジェクト

2023（令和 5）年 7 月

早稲田大学

目次

第１章　乳幼児里親支援研修開発プロジェクト……１
　１．背景・目的……１
　２．実施内容……１
　３．検討委員会……２

第２章　Watch Me Play！プログラム・ファシリテーター養成講座の実施……３
　１．Watch Me Play！プログラム・ファシリテーター養成講座の必要性について……３
　２．Watch me Play！プログラム・ファシリテーター養成講座の実施……３
　３．養成講座に関する考察……１８

付録
第 32 回日本乳幼児医学・心理学会口頭発表資料 ……１９

第１章　乳幼児里親支援研修開発プロジェクト

1. 背景・目的

養育者の分離や喪失を体験し、社会的養護のもとにいる乳幼児は最も脆弱な状態におかれやすいが、日本では３歳以下の子どもの家庭養育の推進が強調されているものの、まだ十分に乳幼児の里親養育についてのサポートが充実していると言い難い状況にある。しかし、社会的養護のもとにいる乳幼児は、妊娠期からアルコールや薬物の影響を受けている場合や早期のネグレクトなどを体験していることもあり、心身ともに発達に影響を受けやすいリスクにさらされていることも少なくない。乳幼児期は、学童期以降の子どもの養育とは異なる養育への配慮のもと、乳幼児期の虐待やネグレクト、トラウマなどの正しい知識、また里親養育支援が必要とされる。我が国ではそうした情報を包括的に得られる研修やプログラムはほとんどなく、参考にできる情報も乏しい。そのため、本プロジェクトでは、乳幼児里親に特化した知識を学べる研修講義と、実践に基づいた子どもの観察方法や家族支援のサポートを含めた、包括的なプログラムの開発をおこなうことを目的とする。

2. 実施内容

(1) 里親養育研修動画の作成

昨年に引き続き、講義では社会的養護のもとにいる乳幼児の里親養育に必要とされる子どもの発達の知識や養育スキルについて各分野の専門家による講義のプログラムを開発した。現在、研修動画をホームページ上に公開している。

(2) 乳幼児里親支援プログラムの実施

昨年度作成した乳幼児里親支援プログラムをもとに、フォスタリング機関、乳児院において、事前研修、動画視聴によるオンデマンド学習、研究協力者の募集、Watch Me Play! の実施、スーパービジョン、事後調査をおこなった。

Watch me Play！は、里親、養親家庭では週3回、1回20分、家庭訪問は月に2回、乳児院では週1回、1回20分、支援者参加は月1回のペースで行い、スーパービジョンは月2回、全12回を行った。新型コロナウイルスの影響で、家庭訪問が中断したり、募集をかけられずスタートが遅れたケースも多く、最終的な事後調査の実施はすべて今年度中には終わらなかった。また、12回が終了した後も、遅れてスタートしたグループのために、追加のフォロ

ーアップのスーパービジョンをその後、月1回、６か月実施した。

（３）The Tavistock & Portmant 講師によるファシリテーター養成研修の実施

乳幼児里親支援プログラムでは、The Tavistock & Portman NHS で開発された Watch me Play！プログラムを実践として使用しているが、支援者に対しての適切なファシリテーターによるスーパービジョンを行うことがプログラムの継続やその成功に欠かせない。そのため、今後の日本での Watch Me Play!プログラムの実践のためのファシリテーター養成研修を 12 回ほど行った。（詳細については第２章参照）

（４）プログラムの評価の検討

プログラムによる乳幼児の発達の変化を捉えていくための、子どもへの侵襲性の低い生物学的指標としてアイトラッキングを使用するための課題を検討した。特にWatch me Play!プログラムでは、遊びを通じて養育者と子どもの関係性の変化などが起こりやすいことから、他者との相互交流における社会的認知能力に注目した課題を設定しパイロット調査を実施した。パイロット調査の結果は第32回日本乳幼児医学・心理学会にて口頭発表を行った。（発表スライドは付録参照）

（５）乳幼児里親支援プログラムの研究希望者の説明会

Watch Me Play!プログラムを含む乳幼児里親支援プログラムへの研究への問い合わせのあった児童養護施設、フォススタリング機関、児童相談所などにむけて説明会を行った。Watch Me Play!プログラムのマニュアルを配布し、希望がある場合は、実際に対面での説明を行い研究協力を募った。問い合わせのあった児童養護施設、また里親支援機関への 2023 年度のプログラムラム導入に向けて、事前の準備をスタートした。

３．検討委員会

社会的養護のもとにいる乳幼児の心身の発達を考慮にいれながら、家族全体を効果的に支援するプログラムを開発するために検討委員会を開催した。日本版の乳幼児里親研修に必要とされる内容の検討と研究評価方法について議論を行った。

(1) 体制

【構成員】（50 音順、所属先は2022年3月時点）

・長田淳子氏 （二葉乳児院）

・引土達雄氏 （国立成育医療研究センターこころの診療部）

【研究所】

・上鹿渡和宏 早稲田大学社会的養育研究所 所長

・岩崎美奈子 早稲田大学社会的養育研究所 所員

・御園生直美 早稲田大学社会的養育研究所 客員次席研究員

(2) 開催状況

プログラムの内容の開発と調査研究の検討のため2022年８月～2023年3 月の間に、検討委員会を５ 回開催した。

第２章 Watch Me Play！プログラム・ファシリテーター養成講座の実施

1. Watch Me Play！プログラム・ファシリテーター養成講座の必要性について

Watch Me Play！プログラムは、無料でアクセスのできるマニュアルが作成されている。特に、スーパーヴィジョンや研修を受けての実施が義務付けられているわけではない。しかし、本プログラムは海外のプログラムであり、本邦の家族に正確に実施するにあたり様々な疑問が出てくると考えられる。Watch Me Play！を家族への支援として普及するためには、子どもに実施するにあたり、すぐに相談や質問のできる環境づくりが不可欠となる。また、支援として Watch Me Play！プログラムを受けに来られる人たちの中には、実際に子どもの養育に問題を抱えている方々がいることが想定される。臨床群の子どもへの対応や、養育者側の課題や問題についてどのように対応をしていくかについても相談できる体制が必要であると考えられる。それらの点から、Watch Me Play！プログラム・ファシリテーターの養成が急務であり、養成講座を行うこととした。

２．Watch me Play！プログラム・ファシリテーター養成講座の実施

プログラムの基礎理解のために、事前に Watch me Play！についての概要の説明会を行い、事前に日本語の実践マニュアルを配布し、養成講座を受けた５名（長田淳子、引土達

雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美）はすでに内容を理解していた。

プログラム開発者である The Tavistock& Portman の Dr Jenifer Wakelyn からオンラインにより、養成講座として 2022 年 5 月～2022 年 12 月まで 12 回実施された。その内容を以下に示す。

第 1 回ファシリテーター養成講座

2022 年 5 月 17 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美（記録）

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

１.参加者の自己紹介と Watch me Play！プログラム（以下、WMP と示す）実施状況の確認

2. Dr Jenifer Wakelyn から以下のコメントや WMP に関する説明

・ケースを増やしていく際には、少ない数から始めて、それを周りに見てもらい、広げていくのが良い。

・WMP は、自由遊びを重視するが、養育者にはしっかりと指示を出して状況を設定する必要がある。

・ケースを持つのが難しい場合は、知り合い友人、またはオンラインなどもある。

・親がなかなか自由遊びをできない場合には、ファシリテーター２名が親と子どもの役割を取ってみる、または養育者に子どもの役をやってもらい体験してもらうのもよい。

・自由遊びが難しい場合、最初は５分くらいで子どもの遊びにただ集中してもらうという体験をしてもらうこともできる。

・支援者としての役割、自分達をどう位置付けるのかについても意識する必要がある。

・支援者は単なる観察者にならないこと。親は観察されていると思うと、緊張してしまう。支援者も一緒に子どもとの遊びに集中することで親に寄り添うことが必要になる。

・オンラインは、家に訪問するのが難しい場合、田舎に住んでいたり、子どもが多すぎてクリニックに来られない場合にも使える。病院の外来などでも使用可能。

・オンラインをやるときには、まず友人など知り合いなどで画面の位置など練習してみるのもよいだろう。

3. 感想と学び

・WMP のケースを早く持ってみたいと思った。また今、自分の家の子ども（里子）にも試してみたいと思っている

・WMP での難しい親への介入の仕方には、ファシリテーターがロールプレイなどを見せてみたり、実際に親に子ども役をやってもらって体験する、またマニュアルを活用するなどのさまざまな方法があることがわかった。
・観察者にならないということは新しい気づきだった。WMP をやるときに、状態をしっかりと理解しておかないといけないという意識があったために、自分も遊びに没頭するということがなかったかもしれない。その姿勢を自分自身に取り入れていくことが必要だと思った。

第 2 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 6 月 7 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美（記録）

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・Video で撮って行うことは WMP ではないこと
・初回と二回目で変化して、楽しくリラックスして遊ぶことができていた→遊びの分析について
・子どもを見て親にも声をかけるバランスについて
・一緒に遊んでいる母を誉めることの重要性について

感想と学び

・先回りしてしまう母親が適切な言葉掛けなどで、子どもが自由に遊ぶことを促すことができていた。
・子どもを watch すること、写真を撮るなどとはことなり、子どもの状態を見守り観察することの重要性を学んだ。またファシリテーターは親子双方にバランスよく関わることが必要であり、母親の適切な行動に「いいね」といった声かけをして褒めることも有効だと学んだ。
・新しい母親に子どもが出会って、うれしさと恥ずかしさのアンビバレントな気持ちで行ったり来たりをしているように思えた。実践でどのようにやっていくのかについてのイメージがついた。
・子どもの気持ちを通訳のようにして伝えることで母親の行動を変えていくといったこともあると気づいた。子どもが見守られていることを理解できる環境、養育者が安心を

感じられる環境を WMP で作ることが大事だと思った。実践において参考にしていきたい。

・養育者の問題に焦点を当てすぎると、本来 WMP で一番主役の子ども像などについての記述が少なくなりやすいことに指摘されて気づいた。また自分の発言が多く、母親があまり話していないことが気になっていたが、逆に母親は遊びを見守りその場にいるだけでもいいということを知ることで、安心したのではないかという指摘で、確かにそうだと思った。

第 3 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 6 月 21 日（火）18 時半―20 時(英国 10 時半―12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・親を安心させることの重要性について

・人形を使ったストーリーに関する遊びの理解

・テーマの連続性があることについて

・母を笑わせることができることにより、母にとって大切な存在となることについて

・母の関わり方に見られる母の幼少期の体験について

学びと感想

・子どもの遊びが断片からだんだんと統合に向かっていく様子がよくわかり、支援者の適切なサポートで WMP のなかで子どもも母親も自信やモチベーションを保ち続けていることが理解できた。

・指示を出さない関わりは、子どもに対するだけではなく、親に対しても有効だということを学んだ。また、WMP 後の親との振り返りについては、親子の状況を考慮して柔軟に対応して良いことを確認できた。

・子どもの一貫した、「見てみて！」という注目のサインが、しっかり声に出せた時から、暴力のエピソードが減少したように感じた。WMP！の際の、支援者の母親への声掛けが、どれくらい行っていいのか、の想像ができてきたように感じる。子どもの変化が、大人の変化につながることの力強さを感じられるケースだった。

・プレイの内容が、展開していく様や、途切れ途切れでありながらも母に関わろうとす

る子どものあり方、母を笑ってもらうことやほめてもらうことによる自信がどのようについていくか、そのプロセスが実感できるケースだった。母の関り方も、成育歴の影響を受けることの Jenifer 先生のコメントが興味深かった。母子の関り両方を見立てていくことの大切さを学んだ。

・子どもがこれまでの経験を一つに繋ごうとする本能を持っていることを教えていただき、改めて、遊びを展開させていく子どものパワーに敬意を感じました。また、母を笑顔にできることが子ども自身の自信になるということは、私にとって嬉しい発見でした。母との振り返りの時には、感動を共有することと、もっと褒めることを意識していきたいと思います。

第 4 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 7 月 5 日（火）18 時半―20 時(英国 10 時半―12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・振り返りの時に話すべきことについて➡何が難しいのか、楽しかったこと

・オンラインで行うにあたって Web カメラを使うことの難しさ

・怖い玩具への理解

学びと感想

・今回は zoom などのリモートでの WMP の様子をみることができ、その際の難しさや問題について理解することができた。また自分は既に子どもを見ていたと考えていた母親が WMP で子どもと目が合うようになるなど別の点に気づいたことや、子どもが気づいたことを口にすることで、子どもだけでなく母親にも子どもの考えを伝えることができるといったことについても再度確認することができた。

・健康な子どもであっても WMP で子どもの発達を促進することができる可能性について学んだ。また、親がうまく遊べていると感じているように見えても、WMP の「子ども主導」という考え方から外れてしまっている場合には軌道修正をはかる必要があることや、WMP に自分も積極的にかかわって入っていくことの重要性を再認識した。

・オンラインの際の工夫と事前準備など想定することが必要であることを学んだ。

WMP を重ねることで、母自身がリラックスしていく様子が見える。また、乳児であっ

ても、子どもの変化が見え、それが母にも影響して遊びに巻き込んでいくようにも感じられる。支援者側の声掛けの配慮と工夫のバリエーションを増やすことができた。
・知り合いに WMP を行うことの雰囲気が感じられ、臨床というかあるニーズのある方に行うこととの違いについて考えさせられた。怖いおもちゃに関する議論が興味深かった。オンラインを行う上での難しさについて学んだ。子どもとのつながりをどのようにしていくかについて、カメラに何を使いどのような位置に置くべきか等も重要であることを学んだ
・健康で安定した家庭を対象にしたケースでも効果を発揮することを学んだ。また、リモートでの実施方法に関する具体的な注意点を教えていただけて、今後の参考になった。WMP という枠組みの中で、親子とそれを見守る第三者が出会い続けていくこと、それによって様々な変化が生じることが醍醐味だと改めて感じた。

第 5 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 7 月 19 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・最初に心理職がプレイをして保護者に見せてから、実際にプレイに入ってもらうことについて
・プレイの理解からみられる子どもの潜在能力について
・プレイの中でガイダンスをどのようにしていくかについて

学びと感想

・はじめに丁寧な WMP の様子を見せてから、親御さんに別々に WMP をやってもらうのは、とても新鮮だった。また適切に父親を励ましながら、どういった関わりをすればいいのかについて伝えることで、父親がしっかりと子ども主導の遊びについて理解していく様子がわかって興味深かった。また発達に問題のある子どもが満足感をもって遊びを見守ってもらえることの重要性についても理解できた。
・子どもと支援者がまず WMP を実施してから父や母を遊びに招き入れている方法は、WMP のレクチャーに良い方法だと思いました。また、支援者が両親を肯定して励ましつつもより良いかかわり方を的確に助言しており、ガイダンスのやり方を具体的に学ぶ

ことができました。支援者が WMP を通して子どもの成長する力を引き出しているセッションに感動しました。

・両親がともに行う WMP では、支援者が家族それぞれに肯定的に関わることで、家族の関係性に良い影響を与えることができ、虐待リスクを抱えた家族にとって横並びのとても良いサポートになると感じた。父母それぞれと行うセッションと合同で行うセッションを組み合わせるというジェニファー先生のご助言もとても興味深かった。また、情緒的な交流が苦手な親御さんに、優しく見本を示し、実践した直後に励ましと助言を提供する方法がとても素敵で、今後の参考にさせていただきたい。

・日常から離れたところで行うことの強みと影響について考察することができた。両親がそういった場でそろって子どもに「うまくやれるように」という指示を抜いてかかわることは、子どもにとってかけがえのない変化となると思われた。WMP！は親子や養育者と子どもとの関係だけでなく、それを介して、父母間へのアプローチも可能なように感じられたし、ペアレントトレーニングとは異なる、持続したゆっくり染み渡るような変化を起こすようにも感じられた。

・子どものプレイや発達に関する Jenifer 先生のコメントは、子どもの潜在的な生きる力や支援の必要なポイントについて気づかされることがあり、とても勉強になった。親子の関係性について体系化して理解することができた。今後、内省することの難しい親や、モチベーションを継続させ保たせる支援について、考えていきたい。

第 6 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 9 月 13 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・親の不安を WMP の中で支えていくことについて

・母子への声掛けをいかにシンプルにしていくかについて

・お風呂場や寝室などで、WMP ができることについて

感想と学び

・親の不安を Watch Me Play!のなかで支えていくこと、また Watch Me Play!を十分に行えるように親の心理スペースを確保できるよう準備をすることの重要性を学ぶことがで

きた。継続した Watch Me Play!のなかで、母親が徐々に自信をつけることができていること、子どもも変化が見られていることはとても興味深かった。
・子どもに寄り添ったプレイをセラピストがいたからこそ、母も取り組めていたところがあるように見えた。セラピストも同じ繰り返されるプレイの中で疲労を感じ、母に心身ともに共感しているところが母を支えることにとても役立っているように見えた。Jenifer 先生が母子にどのようにシンプルに声掛けをするのか、子どものプレイに集中するとともに、母の状態にも気を配り、かかわり方を見定めるということが、WMP！において、とても大事なことのように感じられ、それが難しさでもあるように思えた。
・子どもとの WMP！を、信頼できる大人と共有できること。一緒に WMP！を行う機会があることは、どれだけ養育者にとって支えとなることなのかを知ることができる。子どもとの肯定的な時間を通すからこそ、肯定的に子どもの変化をとらえ、気づくことを一緒に行えることは、母子にとって大切な時間となることが伺えた。
・回数を重ね、その家庭のパターンのようなものが生まれてきたときにこそ、WMP！のマニュアルを通して基本に戻る時間を意識的にもつのが良いと感じた。子どもの遊びを同じ目線で見守り解説し、それを親子にフィードバックしていくことで、大人と子どもそれぞれの自信や安心感を安全に育まれていくこと、改めて学ことができた。
・WMP！を実施することでファシリテーターと親のパートナーシップが促進できると同時に、そのパートナーシップを促進できることが WMP！の魅力なのではないかと考えました。また、お風呂場や寝室など、WMP！はいつでもどこでも提供できる良さがあることを知りました。一方で、WMP！の開始の主導は親にあり、子ども主導で開始することとの違いについて気になりました。遊びは子ども主導ですが、遊びの開始について、どのように理解しておく必要があるか教えていただきたいと思いました。

第 7 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 9 月 27 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

内容

・WMP　Short Guide と WMP Quize の使用方法について

・マニュアルの使い方、記録について

・WMP の実践を正しく実践するために行うべきことについて

感想と学び

・ファシリテーターとして行うイメージを Jenifer 先生のお話を伺い、少しは持てたのではないかと思いました。今後、様々なケースについて困る場合がどのようなことなのかについて、更に考えていきたいと思いました。

・ファシリテーターの役割について、具体的な例を挙げて話していただいたので分かりやすかったです。支援者に対しては、テキストを読んでもらうだけでなく、クイズを一緒に実施してそれについて解説していくことで、WMP の重要な部分を確実に伝えていくことができるのではないかと感じました。クイズは良いツールだと思いました。

・実際にどのような形で支援者に対するファシリテーションが行われているのか知ることができ、とても参考になりました。フレキシブルに展開できる WMP の強みを活かすためには、基本事項（マニュアル、記録の作成等）を押さえておく必要があると感じました。ショートガイドとクイズは、確認がしやすく使いやすいと感じ、提供いただけてありがたかったです。

・今までのファシリテーターの経験を振り返ることができ、整理することができた。クイズやショートバージョンのマニュアルは、初めて Watch Me Play!を学ぶ人にとっては大変わかりやすく、説明にも良いと思った。

・ファシリテーションの内容と、ポイントを確認することができた。子どもと家族に会わせやすいぶん、ファシリテーターが、WMP！の核となる部分、はずせないところなどをしっかり理解しておかないと、ぶれてしまうかもしれないと感じられた。実践される養育者の背景や実施するにあたっての意図によってもアプローチは配慮がいると思われた。

第８回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 10 月 11 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・赤ちゃんとの WMP の特徴

・赤ちゃんの声を鏡のように返していくこと

・支援者が養育者や子どもと一緒に歌を歌うことについて

・子どものプレイや振る舞いに合わせた声掛けについて
・養育者が WMP の後に悩みをお話しされる場合への対応について

感想と学び

・事例検討をして改めて、1 回目の親子の表情等が固いこと、視線や、声掛け、身体接触、周囲の音含め気づきなおすことができた。そして 1 回目から 2 回目の間だけでも、親子で視線をやりとりすることの増大を感じることができた。どれだけ小さな子どもでも、周囲の変化を促す力を持っていることを再認識することができた。
・WMP!のマニュアルを通して説明を行っていたが、母は最初硬く、電気によって歌が流れるおもちゃを使ってよいかを支援者に聞いてきて、「歌を歌いましょう」と返していたところが印象的だった。その後、母の緊張が和らぎ、糸巻きの歌を歌う母と赤ちゃんとのかかわりが積極的になっていったことが印象的であった。赤ちゃんへの支援としてどのように WMP！が役立っていくかがわかりやすく見えて興味深かった。
・赤ちゃんとの WMP！に大切なことはじっくりと観察することであることを学んだ。赤ちゃんはおもちゃではなく母親の顔やからだ、自分のからだを使って遊ぶものであり、赤ちゃんの視線を追うことで何に関心を持っているかを知ることができる。今回のケースでは、WMP!を通して、母親が SNS や育児書ではなく自分の赤ちゃんを通して知識を蓄えられたということが素晴らしく、それを促すファシリテーターのかかわりの重要性を知ることができた。
・初めての育児で不安そうな母親に対して Watch Me Play!を使いながら、非常にサポーティブな支援ができていることで、子どもと母親の距離が縮まり、また母親にも余裕や育児への主体性が生まれていたように思う。また非常に幼い乳児においては、顔の表情や繊細なやりとりが Watch Me Play!では非常に大事であることがよく学べた。
・新生児との Watch Me Play!のプロセスが、マニュアルに守られながら、支援者の寄り添いをとおして、親子の間で細やかな対話が積み重なっていくことが良く分かるケースでした。深く集中して行う交流が、子どもの表現力の発達だけでなく、親子関係・夫婦や家族関係にも影響が派生していくことは、とても興味深く感じました。「子どもがどうすれば良いかを教えてくれる」方法であること、改めて実感しました。

第 9 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 10 月 25 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・共感的ではない養育者への WMP の難しさについて

・精神的な問題のある養育者に対する WMP 以外の支援について

感想と学び

・臨床ケースの場合に Watch Me Play!の枠組みを超えて他の専門家と協力して支援方法を確保する重要性を学んだ。子どもにとって Watch Me Play!が機能することが多い場合も、親に必要な支援がある場合は、それぞれの必要性を考えて、対応が必要であることがよくわかった。養育者は言語的なものやすぐわかるものしか反応できないことから、こうした親に対してはどのようにアプローチするべきなのか疑問に思った。もしかして、身体的な遊びを使ったものの方がうまくいくのではないかと考えた。厳しい状況でも、子どもが Watch Me Play!の中で豊かな表現をしていることに感銘を受けた。

・ファシリテーターが遊びの中で子どもに同調してかかわることによって、発達に遅れのある子どもであっても豊かにコミュニケイトする姿に感動した。子どもとうまく遊ぶことのできない両親に対しては、ファシリテーターがセッションごとに 5 分間デモンストレーションを行い、5 分後は、親を引き入れてうまくいっていたら褒める、違っていたらそのことを明確に伝えることで、子どもの遊びに同調し、子どもの遊びや気持ちを言語化するやり方をレクチャーすることができるということを学んだ。

・子どもの WMP！の中で、子どもが豊かな表現をしていることがわかった。その上で、養育者が子どもに寄り添うことが難しく、その対応について学ぶことができた。WMP！では、親子関係の現実が露になり、親子の気持ちや態度が凝縮して示されるように思われた。その親子の WMP！という現実から今後の対応が検討できるように思われた。WMP！そのものの効果とともに、臨床上の他の支援も必要かを検討する上でも有用であるように思われた。

・子どもの状況によって実施方法や配慮等は変化することはあり得ると思いますが、どんな子でも自分とのふれあい方を遊びをとおして教えようとすることが実感できました（電話や人形の扱い方を通して養育者に”こうするんだよ”と教えているように感じました)。子どもの表現を拾っていく大切さと共に、家族にダイレクトに関わっていく中で、その関係性の中でファシリテーターがどのような立ち位置にあるべきか考える示唆をいただきました。

第 10 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 11 月 8 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・子どもと養育者、遊びを理解する上での WMP 支援者がどのように感じているかの重要性について

・なかなか WMP ができない養育者への対応について

・WMP を正しくできているかに関するチェックリストについて

・プレイルームの設定として、玩具があまりに多くない方が良い

・3 回ほど WMP を行い、WMP だけでは支援が難しそうな養育者への対応について

感想と学び

・きょうだいがいる家庭や親が仕事をしていて忙しい場合には 5 分程度の WMP!を実践するやり方もある。WMP!では親自身やファシリテーター自身がどのような気持ちになっているかを確かめながら、解釈するのではなく子どもの遊びを説明していくことが重要であり、チェックリストを使って今行ったことが WMP!かどうか確認しながら取り組むことの大切さを学んだ。

・養育者と子どもの状況や、実施できる条件など、ケースごとに違いに合わせて実施していく必要があると思うが、チェックリストを確認し直して、外してはならない条件を確かめることができた。家庭の状況によって、WMP が最善の方法であるか見極めながら実施していく必要があるケースとして、気を付けるべき点を確認できた。

・WMP！の内容や WMP！を行う保護者のリアクションのアセスメントから、WMP!だけではない支援のあり方を考えていく議論について確認できた。マニュアルのチェックリストに戻ることの重要性について改めて気づかされた。WMP！が成立しているのか成立していないのかについて検討することによって、親子のアセスメントについても支援を考える上で何らかの示唆があるように思われた。

・WMP！の活用の多様性を感じた。ただし、柔軟であるからこそ、大切にして外してはいけない WMP！の根幹を念頭に置いておかなければならないように感じた。きょうだいケースについての時間の確保や場面の設定については、実施する養育者の負担感が強

まらないようなアイデアと配慮が必要だと感じた。

・Watch Me Play! を効果的に行うためには現実的に親をどのような状況にいるのかといった親のキャパシティや、親へのサポートなどを考えて、Watch Me Play!の適応を考えていく必要性を感じた。また過酷な環境でも子どもが豊かに遊びを展開できることも非常に興味深かった。考えるのではなく感じるということの重要性もより理解することができた。

第 11 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 11 月 22 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・ファシリテーターとしてスーパービジョンをしていくにあたって、出てくる質問に対してどのように答えていくか

・WMP の設定に関する質問への対応

・WMP のモチベーションを維持させ、継続させていくために必要なこと

・里親の希望や不安、そのニーズをいかに把握して、WMP の要素を説明していくことの必要性

・やってはいけないこと（①マニュアルを一方的に送る、②子どもの遊ぶ設定を作らないことをそのままにする、③養育者が子どもに教え始めた時に修正しない、④親と支援者が子どもの遊びに黙っているだけ、⑤プレイのセッションの振り返りをしない）の確認

感想と学び

・Watch Me Play!を行う際の基本的な支援方法や、やり方を確認することができた。それぞれの家庭のニーズにあわせて、里親の持つ希望や不安に沿った形で Watch Me Play!をリンクさせてモチベーションを高めることは重要であると思ったまた Watch Me Play!が子どもと親にとって有益になるために守らなくてはいけない基本的なルールも勉強になった。

・WMP!のファシリテーターを行うときに、ヒントになるものと、基礎的な部分の振り返りができた。里親家庭、施設、地域の子育て世帯それぞれでポイントとなる個所が異

なるものの、基本的な WMP！の考え方を整理しておくことで、柱となる部分がぶれないようにも感じられた。自身が心理職であることから、分析がちにならないようにする必要もあると感じた。

・実際に WMP!を実施する中で生じた数々の疑問を確認でき、重要な点と、状況に合わせて変化させて良い点を具体的に想像することができた。また、WMP!から逸れる 5 つのポイントをご教示いただいて、押さえておくべき点がより明確になり、理解を深められた。ファシリテーターを行う際には、これらの基本的かつ重要なポイントを把持しながら、支援者を励ますことが必要になると感じた。

・WMP！を行うときの良く挙げられる質問についての議論は、そのまま WMP！とは何かということについて考えさせるものであった。その議論は、いかにファシリテーターが WMP！を行う保護者に対して、継続させていくことや動機づけをさせていくことが重要であるかを示していた。プレイをどのように理解していくかということについては、ほとんど議論されていないことが、プレイの意味を自然と考えてしまう自分には、とても印象的であった。そのことが WMP！の大事にしていることを示しているように思われた。

・Watch Me Play!と Watch Me Play!ではない遊びについて再度確認することができた。今回は実際にあがった質問を通して学ぶことができたので実践的で非常に参考になった。特に、ファシリテーターが Watch Me Play!を導入する際の効果的な方法（マニュアルは送付するだけでなく一緒に確認する、実際にファシリテーターが Watch Me Play!を目の前で行う、20 分という時間に縛られず取り組みやすい実施時間を提案するなど）が役に立った。

第 1 2 回ファシリテーター養成講座

日時：2022 年 12 月 6 日（火）18 時半—20 時(英国 10 時半—12 時)

出席（敬称略）：長田淳子、引土達雄、岩崎美奈子、八木香穂里、御園生直美

講師：Dr Jenifer Wakelyn　通訳：宮谷恵深

事例検討を行った。

内容

・WMP 中に子どもに指示を出してしまう養育者への対応

・WMP を通して子ども、養育者の問題のニーズが明らかになった場合の対応（子育てグループなどの利用が必要な場合について）

・子どもに問題がある場合、専門的なアセスメント必要があることについて（WMP だけでアセスメントできるわけではない）
・WMP がうまくいっていないときの声掛けのコツについて
・個別に養育者と話をしていくこと

感想と学び

・子どもに指示を出してしまうケースでは、養育者に不安やストレスがあることから子どもを自由に遊ばせられずにコントロールしてしまうことがあることを学べた。また Watch Me Play!をファシリテーターとして行う際に、どのような手順に従って、どのような資料を使うと効果的かについても学ぶことができたのが良かった。
・マニュアルを読んでもらい、説明をした上でも、実際に WMP！を実施した際に、できていない保護者にどのように話をしていくかのイメージを持つことができた。チェックリストや WMP！からずれていくことの内容についての活用法を学んだ。また、WMP！が難しい保護者に対しては、WMP！だけでなく、話をしていき、その他のサポートを考えていく必要性について考えさせられた。
・養育者とともに行う WMP！で、養育者に対して、WMP！がうまくいっていない時の声掛けの方法や、視点について学ぶことができた。子どもの成長に伴って養育者の WMP！場面での揺れが見られた時も冷静に対応すること、WMP！がどういうものだったのかについて、引き戻しながら、豊かな時間にしていくことが大切だと感じた。これからファシリテーターとして SV をする際に、どのように進めていくのかについても、少しイメージができたと思う。
・WMP！のモデルに沿うことで最大の効果が発揮できるという点を再確認できた。実施にモデルから逸脱しやすい傾向がある養育者の事例について考える中で、アプローチの仕方を具体的に想像できて良かった。また、WMP！の効果を得られやすい養育者と子どものタイプや状況について整理できれば、有効な導入の仕方や、他の介入プログラムとの差別化が図れると思われるので、引き続き考えていきたいと思う。
・WMP!を効果的に実施するためのフィデリティの重要性について改めて学べた。ファシリテーターとして支援者に助言する際に有用な資料も提示いただけて大変参考になった。養育者やその家庭に導入しやすいようにアレンジしながらも、WMP!なのか単なる遊びなのかを丁寧に確認しながら取り組んでいきたい。

3. 養成講座に関する考察

WMP はマニュアルがそろっており、事前に内容は養育者に知らされているが、そのことと実際に WMP に養育者が行うことの難しさ、また支援者として WMP を行うことの難しさについて事例検討を通して理解することができた。その難しさは多様であるが、WMP が成立していないとき（例えば、養育者が指示を出してしまう、養育者が共感的でない、養育者が抑うつ的である等)、WMP を例えば 3 回の様子を見て、WMP だけで支援が十分かを判断し、十分ではないと判断した際には、養育者と個別の時間を作って家族背景等について聴取し支援を検討することに関する講義は実際にファシリテーターとして活動するにあたり重要なことであると考えられる。

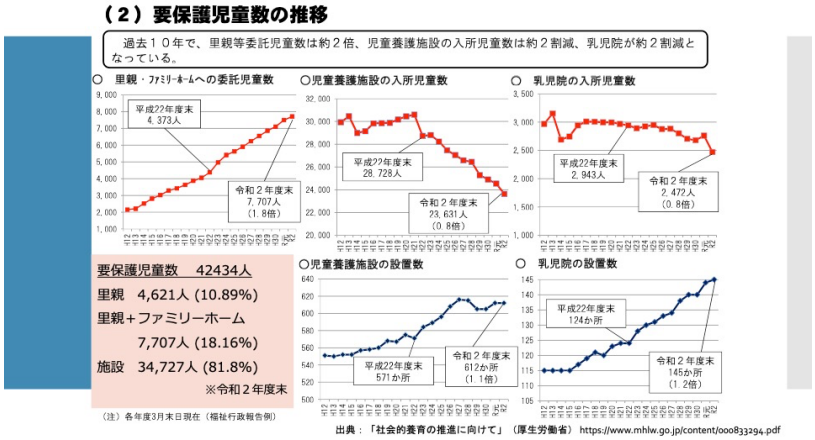
また、プレイの内容に着目しがちであり、そこにファシリテーターの専門性があるように思われるが、Dr Jenifer Wakelyn が養成講座にて強調していたのは、いかに WMP で想定されている子どものフリープレイが子ども主導でできているか、そのことを養育者が寄り添い続けていくために、子どものプレイに支援者がいかに声をかけるかであった。また、養育者のかかわりを誉めていき、養育者のかかわりを子どもが主導で遊びやすいように調整していくことに支援者が目を向けられるかということがファシリテーターの役目であることであった。そのための道具がボリュームの大小異なるマニュアルであり、クイズであり、チェックリストであった。それらを使いこなすことも、WMP ファシリテーターとして担うべき重要事項であると考えられた。

付録：第 32 回日本乳幼児医学・心理学会口頭発表資料

背 景

- 施設で育つ子どもたちは深刻なdeprivationを経験しており、それが**社会的コミュニケーション**の障害につながり、後の精神的問題を引き起こすと考えられている（Levin et al., 2015; Sonuga-Barke et al., 2017）
- 乳幼児の頃に里親に引き取られた子どもは施設で育つ子どもに比べて**社会的相互作用（social interaction）**の問題が少ないこと（Wade, M., Zeanah, C.H., Fox, N.A. & Nelson, C.A., 2020）や、早期の質の高い里親ケアが子どもの感情や認知の発達の基盤となる脳の白質の発達をより正常に促進することが明らかとなっており（Bick J et al., 2015）、家庭環境での質の高いケアの重要性が示唆されている。

⇨ 現在日本では、**家庭養育優先原則に基づく取組**を進めている



問 題

- しかし、里親等委託率と子どもがその家庭で安心して過ごせていることはイコールではない。
- 里親先進国のイギリスなどでは里親委託率は高いが**子どもがいくつもの里親を転々とするケース**がある。
- 1歳～7歳の子ども83名とその里親を対象に、子どもの適応に関連する環境的・文脈的要因を調査した結果、里親と子どもの間の**相互作用の質**が子どもの行動問題と関連しており、相互作用の質が高いほど外向性・内向性の問題が少ないことが示された（Dubois-Comtois K, et al., 2015）。

⇨ **家庭養育のもと、子どもと養育者の相互作用の質を高める**ためにはどうしたら良いか

社会的相互作用の基盤としての視線

- **社会的認知**とは、社会的刺激の認知、処理、解釈、反応の基礎となる一連の複雑な精神的能力のことであり、これらの能力が一体となって、適切な社会的能力の発達と適応を支えている（Beaudoin C, Beauchamp MH., 2020）。
- 乳幼児の社会的認知にかかわる研究では、**視線**が最も重要なシグナルの一つであることが実証されている（Senju and Johnson, 2009; Farroni et al.、2004など）。
- このような視線追従能力は、乳幼児の視覚的共同注意の基盤となり、指差しの発達、言語習得、心の理論の発達を促すことが知られている（Bruner, 1983; Butterworth and Grover, 1990; Baron-Cohen, 1997など）。
- 視線は、自己、他者、環境の三者間相互作用（社会的相互作用）において、注意の方向付けと調整に重要な役割を果たす（Grossmann et al., 2013）。

本研究で明らかにしたいこと

- 乳幼児の社会的認知にかかわる研究では、**視線**が最も重要なシグナルの一つであることが実証されている（Senju and Johnson, 2009; Farroni et al.、2004など）。
- 生後6～30カ月の乳児118人を追跡した縦断的研究では、6ヶ月の時点で**安全な母子愛着関係にある乳児は、不安定な母子愛着関係にある乳児と比較してより頻繁に視線追従を行う**ことが示され、10ヶ月の時点では、母親が産後うつ病でない場合に、より頻繁に視線追従が見られることが明らかになっている（Kim A, et al., 2020）。

➢社会的養護の子どもはアタッチメント対象との分離や喪失を経験しており、そのことは社会的認知的動機にも影響を及ぼしているのではないだろうか。

➢本研究では、**社会的場面における視線計測を行うことによって、社会的養護の子どもの社会的認知の一端を明らかにしたい**。

目的と臨床的意義

- 本研究では、**社会的養護下の子どもの社会的認知発達の特徴を調査し、他者との相互交流に及ぼす影響について探索的に検討する**ことを目的とする。
- 本研究結果は、社会的養護の子どもたちに対する発達的理解につながり、**相互交流を促し安心感のある関係性を築くためにどのようにサポートすべきか**について示唆を与えると考える。

方法

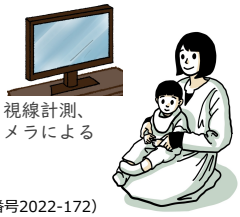
【対象児】

- 乳児院　：男児4名、女児9名　10か月～27か月（平均18±6.1か月）
- 家庭養育：男児7名、女児8名　9か月～30か月（平均21±5.96か月）

いずれも視機能、全般的発達の遅れはなし

【調査内容】

- 主たる養育者：背景情報の聴取（乳児院）
  Vineland-Ⅱ適応行動尺度（実親家庭）
- 子ども：社会的刺激画像を提示し、アイトラッカーによる視線計測、サーモグラフィカメラによる体表温度測定、小型ビデオカメラによる行動記録



※ 本研究は早稲田大学の倫理委員会の承認を得て実施しています（承認番号2022-172）

乳児院の子どもの背景

ID	月齢（月）	性別	入所理由	在院期間（月）
1	20	男	被虐の恐れ	5
2	10	男	心理的虐待	9
3	15	女	心理的虐待	7
4	26	女	心理的虐待	26
5	14	女	養育困難	14
6	15	女	心理的虐待	15
7	27	女	養育拒否	23
8	12	女	ネグレクト	12
9	26	男	身体的虐待	12
10	23	女	心理的虐待	22
11	11	女	養育困難	7
12	24	女	ネグレクト	15
13	13	男	ネグレクト	13

提示刺激画像

分析方法

【視線】

- ソフトウェアTobii Studioを用いて各刺激にAOI（area of interest）を設定し、遊び刺激・挨拶刺激では範囲内の合計注視時間を計測し、共同注視刺激では範囲内の停留点が女性の顔から他の場所に移動した回数を試行数、女性の注視したマラカスに移動した場合を正反応とし、正反応数/試行数を計測

【体表温度】

- 刺激提示直前および直後の体表温度を計測し、温度変化を測定

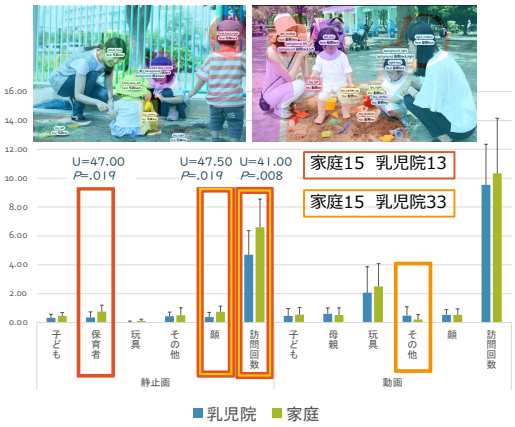
【行動観察】

- ソフトウェアELANを用いて、刺激提示時の養育者と子どもの言動を分析

結果１
合計注視時間

遊び場面

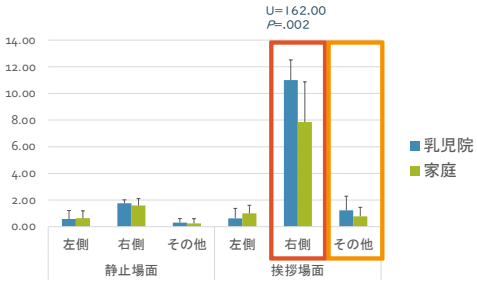
保育者　家庭＞乳児院
顔　家庭＞乳児院
訪問回数　家庭＞乳児院

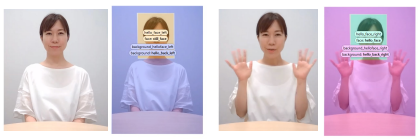


結果２
合計注視時間

挨拶場面

挨拶場面で挨拶する女性
家庭＜乳児院





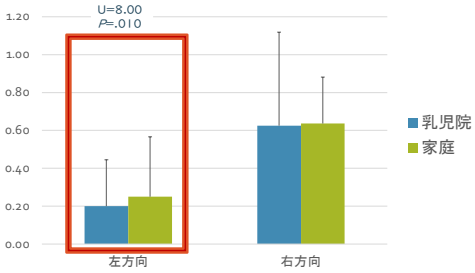
結果３

共同注視

(正反応数／試行数)

左方向（１回目）

家庭＞乳児院



結果４

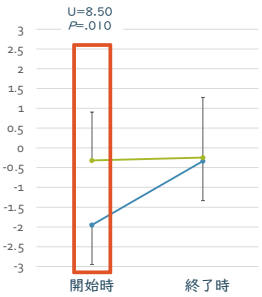
体表温度

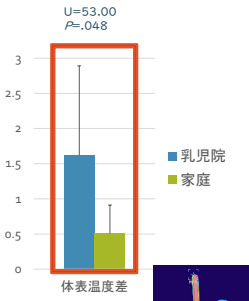
開始前

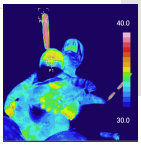
家庭より乳児院の方が低い

前後の差

家庭＜乳児院







結果５

行動観察

家庭

＊すべての子どもに
いずれかもしくは複数該当

- 笑う
- 手をたたく
- 指さし
- コメント
- 母をみる

乳児院

＊5人の子どもに該当

- かすかに笑う
- 手がわずかに動く
- 指さし

早稲田大学研究院　総合研究機構
社会的養育研究所
２０２２年度
乳幼児里親支援研修開発プロジェクト報告書

2023（令和 5）年 7 月

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION